

「わたし達は変えられます」

コリントの信徒への手紙一 一五章三五～五二節

南山教会 二〇二五年九月一四日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日も一緒に、みことばに聴きましょう。

新約聖書のコリントの信徒への手紙一で、パウロはその初めに、一章一八節（新約三〇〇ページ）で「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と語りました。この言葉は、初めて聞く者にとってはたいへん分かりにくいものですが、パウロは続けます。「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めました」（二章二節三〇一ページ）と。そのように心に決めたパウロが最も大切なこととして私たちに伝えたこと、それが今日お読みした一五章の始めに記されています。三節から八節「すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れ、…最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れたこと」だと。ところが、パウロはここで次のように問わざるを得なかったのです。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか」（一二節）

と。

キリストの教会といえども、死者の復活を単純な死体の生き返りであると、復活とその体について自然的、生物学的な視点から理解しようとする限り、復活を否定しようとするのも無理のないことではないかと思えます。パウロが生きた紀元一世紀当時もそうであつたし、現在もそうであるかもしれません。

こうした状況の中でパウロは死者の復活を取り扱い、教会が何度も聞かなければならない復活の教えをここで語ったのです。彼は、体の復活を軽蔑するコリントの教会の人たちに対して、読者にわざと反論させるといふやり方で復活についての説明に乗り出します。「しかし、死者はどんなふう to 復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれない」(三五節)と。「どんなふう to、どんな体で」ということで聞かれていることは、そこで問題にされていることは、「死者はどんな形で復活するのか」ということですが、その質問に対してパウロは短く、激しい非難の言葉を浴びせたのでした。「愚かな人だ」(三六節)と。

「どんな形で復活するのか」と聞いてしまうところに、彼は先ほどお話しした、復活を単純な死体の生き返り、自然的、生物学的な視点で理解しようとする考えのあることを見抜いたので、そのように聞いて来る人に対して「愚かな人だ」と非難したわけです。

そこで三六節後半から、パウロは自然の類比をいくつも用いながら愚かではない自らの主張を固めていくわけですけれども、そこで中心となるのは三八節の言葉です。「神は、御心のまに、…一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります」。これは、「あなたが蒔くものはただの種粒一裸の種粒だが、神はその裸の種にそれぞれ体をお与えになる」ということで、彼が続けて語るのは、その体の多様性についてです。

そしてこの体の多様性について語っている箇所が、パウロがその直後に語る復活の前奏曲、序曲となって四二節からの復活の教えへと繋がり、四四節の結論「自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」に結びついていきます。神さまによって蒔かれた種は、死んでこそ命を得る種粒なのだということです。

「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し…」(四二節)というのは、腐敗しやすく、汚れ、弱いものとして蒔かれた私たちの現在の体、この生命が失われると、神さまは御心のままにその裸の種に朽ちない、栄光ある、力強い体、次の生命である復活の体、霊の体を与えられるということです。「自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」。そしてこれらすべてのことの基として、最後のアダム、すなわち主イエス・キリストが命を与える霊となったことが告げられます。

この所で、たいへん重要な言葉なのですけれども、しかし私たちを混乱させる言葉がやはり「体」という言葉ではないでしょうか。体は私たちにとってたいへん身近にあるものですから、どうしても具体的な「物」を意識してしまうのではないのでしょうか。

私たちは死後の魂の平安ということをよく口にしたり祈ったりしますが、その時どのようなイメージで祈っているでしょうか。天上の魂がこの地上を微笑みながら見下ろしているというイメージでしょうか。そこに体という意識はあるのでしょうか。

しかしパウロはあくまでも「体」にこだわるのです。パウロがここで言う体、霊の体は、私たちの現実の経験の外にあると思うのですが、それでもそれは体なのだとパウロは論じています。私たちは甦られたキリストの体を通してわずかにこの霊の体について知り得るのみですが、そしてそこにこそ私たちと復活のキリストとの結びつきもあるのですが、パウロがここで「キ

リストは命を与える霊となった」（四五節）と語っているのは、私たちが、死んで復活されたキリストの霊によつて生かされる体を与えられたということではないでしょうか。キリストによつて、すべての人が生かされる霊の体を与えられたということです。

そして五〇節、パウロはやはり彼独特の議論の進め方で、コリントの教会の復活を否定する人たちの考えそのものを踏襲しておいて、それが「自然の命の体」を表す「肉と血」という言葉ですが、しかし「わたしはあなたがたに神秘を告げます」（五一節）と一挙に自分の庭へと論争相手を引き込むのです。「最後のラッパ」（五二節）は「主の日」のしるしです。神さまの力が明らかにされるその最後の日に、死んでいる者も生きている者もたちまち、一瞬のうちに、今とは異なる状態、すなわち復活の霊の体へと変えられるということです。死んでいる者も、私たちが生きている者もすべてが、最後のラッパの鳴る時、一瞬のうちに復活の霊の体へと変えられる、ということです。

これが「死者はどんなふうに、どんな体で復活するのか。どんな形で復活するのか」との問いへの最後の答えです。それはまさに神秘、奥義と言えるものです。しかしそれは私たちの創造主であられる神さまの意志である恵み、恩寵としての必然、必ず起こるものであるとパウロは告げるのです。私たちは変えられる。必ず、です。ここに、私たちの、死してなお生きる、自然の命の体に死んで、なお復活の霊の体に生きる希望があります。

そしてこの後に皆さんと一緒に歌う讃美歌「球根の中には 花が秘められ」も、神さまは私たち種の中に秘められている生命、私たちの気づいていない、考えもつかない神さまの霊の宝を、私の時ではなく、神さまの時に応じて必ず生かしてくださるという希望を歌った約束の歌ではないでしょうか。